

## 外国の子どもの学習サポーター養成講座

検証実施機関（団体）：一般社団法人磐田国際交流協会

一般社団法人磐田国際交流協会 茂木 眞佐代

### 1 検証対象の研修・授業について（該当するものにチェックを入れてください。）

養成／研修	<input checked="" type="checkbox"/> 養成 <input type="checkbox"/> 研修
タイプ	<input type="checkbox"/> 基礎教育 <input type="checkbox"/> 専門教育 <input checked="" type="checkbox"/> 支援員教育
研修・授業日（期間）	2018年10月14日～2018年11月22日
総時間数	10時間（2.5時間×4回）
研修・授業科目名	外国の子どもの学習サポーター養成講座
受講者	人数（6人） 1回目のみ公開講座のため33人 年齢層：20代1人、30～40代3人、60代2人 外国人児童生徒等教育の経験：有1人、無5人 日本語指導（成人対象を含む）の経験：有1人、無5人

### 2 地域及び学校現場の外国人児童生徒等の受け入れの状況

#### （1）当該自治体における外国人児童生徒等の数・分布とその民族背景

【数】2018年5月1日現在 市内公立小中学校在籍：

外国籍及び外国ルーツ（帰国子女含む） 582人  
（外国籍のみ：454人）

【分布】市内公立小中学校 32校中 外国籍及び外国ルーツ（帰国子女含む）28校に在籍  
（外国籍のみ：23校に在籍）

【民族背景】国籍別順位：ブラジル、フィリピン、ペルー、中国、ニュージーランド

他に少数だが、アルゼンチン、パキスタン、バングラディッシュ、ベトナム、スリランカ、ポルトガルの児童生徒が在籍。多国籍化が見られる。

南米日系人が最も多い。日本国籍を含むフィリピンルーツの子どもも増加している。

#### （2）当該自治体における外国人児童生徒等の受け入れ・指導体制

【受け入れの窓口】磐田市教育委員会学校教育課

【指導体制】県による配置：加配教員 11校12人

学び方支援非常勤講師 8校6人（80時間／週）

市による配置：外国人児童生徒初期支援教室 NIJI コーディネーター 1人

外国人児童生徒支援員 5人

外国人児童生徒相談員 ポルトガル語5人、タガログ語1人

JSL サポーター 14人（2018年度実績）

※JSL サポーター：在籍学級での学習において JSL カリキュラムに則り、入り込みで学習をサポートする支援者

#### （3）外国人児童生徒等教育に関わる教員（一般教員を含む）、支援員の教育力の課題

外国人児童生徒の実態には一人ひとり個人差があり、それぞれへの対応力を向上させることが必要で

ある。

### 3 研修・授業の成果について

#### (1) (受講者アンケートより)

##### ①受講者の研修への期待 (アンケートのⅠより)

【1回目】・外国人児童生徒の現状と課題について知りたい(最近の傾向、全国的状況)

- ・磐田市の現状と支援について知りたい
- ・子どもとの接し方、支援の方法

【2回目】・外国人児童生徒がどのような支援を必要としているか、どのような支援をしているか、外国人児童生徒等の教育の現状、サポートの役割などを知りたい。

【3回目】・サポートの様子、児童の学習の様子、児童の反応、児童への接し方などを知りたい。

【4回目】・児童へのアドバイス、やる気を引き出す方法などを学びたい。

- ・児童が自ら学んでいけるようにする方法を学びたい。
- ・児童が必要としているサポートを感覚的につかみたい。
- ・サポートが自分に向いているかを感じたい。
- ・外国人児童への支援について学びたい。

##### ②受講者の研修内容の理解度・満足度 (アンケートのⅢ2①より)

【1回目】・受講生全33名中多くの受講者が「非常に参考になった、参考になった、」と回答した。アンケート項目は以下の8項目である。1.外国人児童生徒等受け入れの現状と施策(27)、2.来日の経緯など社会的、歴史的背景(20)、3.子どもの認知発達と言語習得(22)、4.外国人児童生徒等の心理と適応(20)、5.母語・母文化・アイデンティティ(18)、6.やさしい日本語の考え方と生かし方(22)、7.応援できる情報とネットワーク(16)、8.磐田市の現状と支援体制(23)(()内は「非常に参考になった」または「参考になった」の回答数)。「あまり参考にならなかった、参考にならなかった」という回答は見られなかった。

- ・特に「外国人児童生徒等受け入れの現状と施策」はほぼ全員がよく理解・満足できたようである。

【2~4回目】・初期支援教室の位置づけ、学校による受け入れ体制の違い、サポーターの

立場と役割、実態把握のための視点、学習参加のための支援などについて、受講生(参加者は2回目・4回目は5名、3回目は4名)は概ね理解でき、回を重ねるごとに理解が実感として深まったようである。アンケート項目は以下のとおりである。( ()内は「非常に参考になった」または「参考になった」の回答数)。

- 2回目：1.学校の受け入れ体制(3)、2.学校組織の中でのサポーターの役割(4)、3.学習参加のための支援(4)
- 3回目：1.東部小学校の支援体制と対象児童についての理解の視点(3)、2.在籍学級での学習参加のための支援(種類と方法)(3)
- 4回目：1.児童の実態把握の視点や方法(4)、2.児童の実態と有効な支援(4)、3.在籍学級での学習参加のための支援(種類と方法)(4)、4.サポーターの立場と心得(4)

##### ③関心を高め、教育力の向上を促したと考えられる内容・活動 (受講者アンケートⅢ2②の回答より)

- 【1回目】・やさしい日本語の考え方と生かし方・・・国語の教科書を使い、リライト教材を考える活動。

リライト教材の存在を知った受講者や、支援に利用したいと思った受講者、やさしい日本語を意識することで外国人児童の学習促進につながると感じた受講者がいた。

- ・弁護士になる青年の事例・・・新聞記事を使い紹介した。

支援する側が否定的な意識を持たないことが大切であることがわかった。

- ・支援者としての基本的な姿勢についての講話

心で寄り添い、子どもたちの自己肯定感やモチベーションを高めることの大切さを多くの受講者が心に留めた。

- 【2回目】・初期支援教室と在籍学級の見学。

児童生徒もサポーターも楽しそうで意欲的に取り組んでいる様子に好感を持ったようである。

- ・見学後の話し合い。

率直な感想や疑問が発言され、それに講師が答えることで、児童生徒や支援体制などについての理解が促進された。

- 【3回目】・見学前後にその学校の現状について情報共有、疑問に答えたこと

サポートについての理解が深まった。

- ・取り出し教室と在籍学級を見学したこと

取り出し教室の位置づけや必要性がよく理解できたようである。

- 【4回目】・サポートを体験する前に、実態把握や支援の視点、サポートする上での注意事項などを共有したことが役立った。

- ・実際に児童と1対1で接したこと

サポート内容や、児童の気持ちに触れるという感覚を実感できた。

- ・体験後に加配教員や現役サポーターから話を聞いたこと

サポーターの役割の理解に大変有益であった。

④受講者が今後に望む研修・授業の内容と活動（受講者アンケートⅢ3より）

【1回目】内容：学び直し、中高生支援、教材紹介、学齢期だけでない将来に渡って有意義に生きるための支援のあり方、具体的な指導方法、不就学児童への対応、保護者への対応

活動：事例紹介が一番望まれている。

【2～4回目】内容：外国人児童生徒の思いや要望を知る、家庭環境を知る、児童との関わり方やコツ、サポート活動をしている人の話・担任の先生の話をお聴く

活動：事例紹介、模擬体験が望まれている。

(2) 研修企画の立場から見た、研修の成果と課題（企画者アンケートⅢの回答より）

【1回目】・講師は、受講者がどのような立場の人かということをお話し、企画者の期待する内容を全て取り入れて講義してくれた。

- ・統計データ、写真その他多くの資料を示しながら、あるいはワークシートを使い受講者が参加しながらの講義は、具体的で理解しやすかった。子どもたちの事例を多く紹介してくれたことも理解を助けた。
- ・多くの受講者の期待にはおおよそ沿っていたと考える。
- ・企画者として最も意識したかった支援者としての基本的な姿勢・考え方の部分が語られ、それが多くの受講者に理解されたことは、大きな成果であった。
- ・1回目は概論という位置づけだったので、支援の方法などについては盛り込まなかった。2回目以降で少しずつ触れていく計画であった。

【2回目】・外国人児童生徒初期支援教室と通常学級を見学した後、感想や気づいたことを発言してもらい、疑問に答えることで、受け入れ体制やサポーターの役割について理解を深めてもらった。

- ・学習参加のための支援については、資料は配布したが、話として取り上げることは時間的にも難しかった。

【3回目】・受講者の期待と講座の内容はだいたい一致していたと思うが、アンケートの項目に挙げた内容について確実に提示できなかった。

- ・事前の情報提供→見学→見学した授業、サポートについての解説という流れは、理解を深めるのに有効だった。

【4回目】・サポートを体験したこと、加配教員と現役サポーターの話をお聴いたことは、サポートを理解するのに大変有益だった。サポーターの役割として、子どもたちの気持ちを支援することが一番大切だということを実感できたようである。1回目の講義でお聴いた、「心に寄り添う、自己肯定感、モチベーション」ともつながった。

- ・2回目から4回目を通して具体的な支援方法についてはあまり話せなかったが、受講者はサポーターになるかもしれない人であるので、現時点では問題ないとも言える。今後実際にサポーターになる場合は、子どもや担任との関係性を築く力や日々の現状の中で最善を判断する力を更に高め、学習参加のための様々な支援方法についても身につけていく必要がある。

【追跡調査、1回目】について（アンケートより）

- ① 講座で学んだことから、子どもと一緒に考える、子どもの可能性に限度を設けない、できたことを見つける、子どもが夢や目標を持って学習に取り組めるようになど、子どもの心に寄り添った支援を意識するようになっている。
- ② 工夫や改善の試み：難しいことばを分かりやすい日本語に変えて伝える、数学でも言葉の意味を説明したり図で示したりする、短くてもその日の出来事などを文章にする練習 など

ど。

- ④ 今後に望む研修：サポート体験、サポーターと話す、日本語教室の見学、児童スペースなしの背景や学校外の様子を知る、地域を超えて幅広い情報と最新の取り組みを学ぶ など。
- ⑤ 自身にとっての価値・意味：自身の考え方や見方・視野・視点が広がる、コミュニケーション力が向上する、多様性を知り寛容さが身につく など。

#### 4. モデルプログラムについて

##### (1) 養成・研修内容構成（報告書 pp. 72-76）について（意見）

前提として・・・モデルプログラムは主に教員（支援者の中でも指導する立場の人）

を想定していると思うので、当協会が必要とする JSL サポーターの養成に一番必要なことがどれに当たるのか、実は確信がない。が、項目が明示されているため、概論など内容を考えるには、必要なものを的確に選ぶことができた。また、これまでの活動で積み重ねてきたことを、細目に当てはめることで整理できた。

- ・追加が必要な項目はないか。  
やさしい日本語という考え方
- ・項目の構成（配置・カテゴリー化）は適当か  
活用した項目については適当と思う
- ・項目の数や具体性は適当か。  
活用した項目については適当と思う

##### (2) モデルプログラム（報告書 pp. 207-244）について（意見）

- ・90分程度のモチーフ型のプログラムは、選択・組み合わせがしやすかったか。
  - \*1回目は概論として外国人児童生徒について多くのことを取り入れたかったので、内容構成の項目から必要と思われるものを選び講師に依頼した。モデルプログラムは21項目の一つひとつにつき一つのモデルプログラムになっているものが多いので、そのままを選択することはできなかった。
  - \*2回目以降は、やりたいことが先にあったので、モデルプログラムでなく、やはり内容構成の項目をやりたいことに当てはめて考える形になった。
  - \*モデルプログラムを改めて見返してみると、一つのモデルプログラムから一部を抜き出して他と組み合わせることもできそうなので、研修等でやりたいことに合わせて使えると思う。
- ・モデルプログラムは実施カリキュラム作成時に、参考になったか。
  - \*カリキュラム案を作成（記入）する際には参考になった。講座の構成や内容を考える際には上記の事情で項目の方を利用した。
  - \*講座を実施した後で、取り入れた項目についてのモデルプログラムを見たところ、企画したカリキュラムと同じ流れだった。
- ・講義・活動・フィールドのバリエーションは、活動を考える上で役立ったか。
  - \*今回の講座は、1回目のバリエーションは講師に任せ、2回目以降についてはやりたいことが決まっていた。バリエーションを選んで活動を考えたというより、やりたい活動をバリエーションに当てはめた。1回目は講義と活動、2回目以降も講義、活動、フィールドを取り入れた講座になった。
  - \*今後もバリエーションを混ぜながら、研修などを考えるとよい。

(3) モデルプログラムの活用で研修の運営が円滑になったか。

- ・現場の課題と研修内容を関連付け、受講者に目的を伝えやすくなったか。  
\*受講者に知ってほしいこと、理解してほしいことを運営者が強く意識したことで、受講者にしっかり伝わったかもしれないと思う。
  
- ・企画者と講師間で研修運営についての考えを共有しやすくなったか。  
\*1回目については、研修の目的・内容を明示することができ、共有しやすかった。  
\*2回目以降は講師が企画者でもあったため、共有できた。
  
- ・複数回の研修の場合には、各回の関連付けがしやすくなったか。  
\*研修を通してすべきことが整理できた。

(4) モデルプログラムの活用を通して、研修・養成で、どのような力を高めてほしいか。あるいは、高めるためには、どのような活用の仕方が必要だと思うか。

- ・外国人児童生徒等を取り巻く現状と JSL サポート活動の意義や趣旨を理解し、支援を必要とする児童生徒一人ひとりに対して最善のアプローチができるようになること。
- ・上記のことは現役のサポーターにも高めてほしい力であり、自身のサポートを振り返りながら、自律支援や学習参加のための支援のスキルアップに繋がるような研修を行っていきたい。